

## 小学校入学直前の幼稚園の生活(三)

お茶の水女子大学  
幼児保育研究室



幼稚園生活の最終期であるこの三学期を、子どもたち一人一人は、どのようにして自らのものとしてしているのだろうか。

さまざまな新しい価値との出会いに心をおどらせる子ども、力を合わせて成し遂げる大きな営みに全身をぶつけていく子ども、自分の世界を整理し自分なりのまとまりを作ろうとする子ども等々、これらの姿のなかには、目を見はるような鮮やかさで幼稚園生活が開花している。

ここでまた、幾つかの観察記録を手がかりとしながら、この時期の子どもの姿を考えてみることにしよう。(本田和子)

### 一 さまざまな価値との出会い

#### ◆文字を使って遊ぶ その一

二月一日 M夫は幼稚園にくるとすぐに、きのうやっていた

くじびきの箱を探して持ってくる。M夫「これくじ」そこに男児が四人よってくる。M夫「もう一つあるよ」と箱を持ってくる。H夫とM夫はくじびきの箱をずらりと並べながら、ひろみの「み」とまさみの「み」は同じだねと話している。(ここでは、一つの文字を抽出して同じ字であることを確認している)

M夫は細長い画用紙を出して、ひらがなを書き始める。H夫はそばに来て見る。「てんとうむし」と書く。もう一枚「しゅうまい」と書く。H夫はそれを見てゲラゲラ笑う。(これは、くじびきのあたりの賞品を示すもの) 次の紙には「はずれ」と書き、次の紙には「ふぐ」と書く。H夫はそれを見てまた、ゲラゲラ笑う。

次の紙には「りんご」と書く。そこにK夫も来て「はさみ」と書く。M夫とH夫がのぞきこむ。K夫は「まっこうくじら」

「でぶぶく」と書く。M夫が「ばか」と書くと、K夫も「ばか」と書く。M夫は「たこ」と書き、K夫に見せておもしろそうに笑う。次にM夫は「ういうつくしげみ」と書いて、「ちよっと」とS夫を呼び、ささやいて見せる。そしていっしょにゲラゲラ笑う。

この記録に見られるように、はつきりした輪かくのない言葉を、ひらがなで書いて、二人の子どもがゲラゲラ笑い合っている。その語のもつ音がおもしろかったり、その語の内容のもつイメージがおもしろかったりする。そして、次々に面白い語をひらがなで書いて楽しんでいる。こうして、笑い合ったりふざけ合ったりする中に、文字がとり入れられていく。(津守真)

◆文字を使って遊ぶ その二

三月八日 きょうはシンデレラの音楽劇遊びがへやいっばいに広がっている。にぎやかではなやいだ空気がへや中を支配している。しかし、K夫は、劇には背を向けて、ひとりでスピードくじ作りを進めていた。画用紙を切り、一枚一枚に言葉を書いて折る。それを箱に入れて、ほかの人に引かせるのである。

K夫は、画用紙にマジックで石を積み重ねるようにひとつひとつ四角いわくを書いた。それから一枚切り取っては言葉を書き入れ、また次の一枚を切り取っては言葉を書き入れる。こう

してくじを作っていたため、くじを作り終えた時には、画用紙のきりくずは階段状に残されていた。

はじめに短冊型の小さい紙片をたくさん作っておいて、それに言葉を書き入れるのが、普通のおとなのやり方である。このようなおとな的方法とは異なったこの子どものやり方が、興味深く思われた。

(中村美智子)

子どもたちは、さまざまな遊びの中で「文字」と出会い、それとかかわりをもつ。ここでは「くじびき遊び」の中にそれを取り入れている。文字は、まごうかたなき文化遺産であり、文化的に「価値あるもの」である。

ところで、子どもたちにとって、文化遺産とは「伝達されるべきもの」であり、価値とは「受容すべきもの」なのであるうか。自分たちの遊びの中に大笑いしながら文字を取り込んでいく子どもたちや、「くじをたくさん作ろう」という自分なりの課題のもとに、文字を使っていくK夫の動きからは「価値を受容する」といった受け身の姿は引き出しにくいのではないか。

また、文字が自由に使えるその同じ子どもが、くじびき用の紙を一枚ごとに切り取るという、物に即したふるまい方を示している。ここにも、この時期の子どもたちの独特な発達の姿がうかがえる。

(本田和子)

◆美しいものの追求 その一

三月八日 霜で遊んでいる子どもたちを見ると、K夫はひとりで霜を取りに行った。両手に持てるだけの霜を持って帰ってくると、「おい、もつと霜とってくるな」と大きなビニール袋を持ってかけていく。取り終わると「ぼくが取ってきたんだぞ」と言いながら、眺めては持ち歩いた。H夫のそばに寄っていつて「ぼくお水の中へ入れておくんだ」と、水を入れたバケツの中に袋ごと浸す。(記録略)

やがて、K夫はビニール袋にさまざまな色のマジックで水玉模様をかき息を吹きこんで口元をリボンでしばる。「ほら、きれいでしょ」と皆に見せて回る。

三歳児のへやに行き、「よかったらこれあげようか」と、小さい子に渡し、小さい子が嬉しそうにかけていくのを見送る。

K夫はひとりでも嬉しそうに「ああいうのもつと作ろう」とへやに帰る。へやにもどつてから、誰にもなく「ああいうのいっばい作ろう」と言いながら、同じようなものを作る。

「おみやげじゃないもん。こんどは自分の。この中にね、赤い実や何か入れるんだ」と持ち上げて眺める。(中村美智子)

◆美しいものの追求 その二

二月一日 一〇・〇六―一〇・一四

へやにはいつてきたI夫が、保育者の手もとに目を止める。

保育者は、淡い色の薄紙でリズム劇の小道具を作っている。紙がヒラヒラと動く度に、I夫の表情がゆらめく。微笑とも、あこがれともつかない何かが、ゆらめいて消える。(記録略)

I夫は絵本のコーナーに近寄り、一冊抜き出して表題を読む。「大きなりんご」それをもとにもどし、また一冊抜き出す。チラと見てすぐもどす。立ったまま、視線をへやの中央にさまよわせる。へやの真中では、女兒がシンデレラのレコードに合わせてクルクル回っている。薄紙のボールがヒラヒラする。

I夫は、ふと、一冊の本を抜き出し、それをじつと見る。胸にかかえて二、三步歩き、またじつと表紙に見入る。へやのすみのいすに腰をおろし、しみじみと表紙の絵を眺める。表題を読むともせず、頁をくろうともしない。ただ、美しい色調の絵をじつと見つめている。(本田和子)

K夫の場合、戸外の霜の美しさにまず魅された。「霜のきらめきをいつまでも」という願いが、袋に入れて水の中につける行為となって現われる。しかし、霜の寿命はさほど長くない。すきとおる美しいものに魅された心が、ビニール袋に美しい色で絵をかくという行為を生み出していく。そして、美しいものに感動した心が「幼い人と分かち合う」という優しい行為へと

つながっていく。

I夫はまず、保育者の手もとでヒラヒラする薄紙の動きに引きつけられた。この時のI夫には「対象を美しいと認める」といったような精神活動のまとまりはない。ただ、美しい動きに共感して、心をそよがせている。絵本のコーナーと向き合った時、I夫の心のこのそよぎが、初めて形をとってまとまった。

そして、あれこれと迷った揚句手にした一冊の本が、すなわち「美へのかわきを充たすもの」だった。

目に見える現象として「子どもが何をしているか」を考えるのではなく、その底に流れる「子どもが追い求めているもの」に目を向けるならば、これらの姿は限りなく貴重なものと思われる。

(本田和子)

## 二 全身でぶつかる

### ◆大きな山づくり

九・四二 男女児七人が、くまでとシャベルで砂を掘っては山につんでいる。それぞれが、全身の力で掘っている。女の子が、砂を掘り返す役割になる。どこから男の子二人が、「白砂できたぞ」とふるいでふるった砂をもってきて、山にかける。

九・五二 みんな白砂つくりに移って、山のそばにはだれも

いなくなる。(記録略)

一〇・〇〇 また、山にはだれもいなくなる。砂場の近くで、白砂作りが続いている。四歳児が「あのお山ね、ぶっこわしてやるぞ」と言って通ると、白砂作りをしていたひろみつがその子の方をにらむ。放ってはあがるが、みんなにとって大事な山のようにである。(記録略)

一〇・二〇 IY夫が山をへらでたたきながら、「トンネル作らない方がいいぞ。すぐ、こわれるんだから」と言う。だれかが「まだ早いよ」と言う。「かたまってから掘った方がいいよ」などと話している。ついに、K夫がトンネルを掘り始める。HK夫も掘り始める。

一〇・二八 保育者が砂場に来て、「ああいいのができたわね」と言いながら、一人一人の袖をまくる。

HY夫は、反対側でトンネルを掘っているH夫に「H夫ちゃん、つなげよう」と言う。K夫は「かたいな」と言って、立ち上がって、反対側のHM夫に「HM夫ちゃん、ぼくとHMちゃん、まだつながない」と言う。HM夫は「ぼくとK夫とつなぐのかすこい」と言って掘り続ける。今度は、HM夫が立ち上がった、「K夫、がんばろうぜ」と言う。ここでは、現実につながる可能性は問題になっていない。つなげようとする、一人

一人の意欲で、掘り進められている。

一〇・三五 K夫「まだ、HM夫ちゃんとぼく、全然通じていない。だって、一メートルくらいこの山の長さあるんだもん」と言う。HM夫「H夫もK夫のところ掘れ」

H夫は、K夫の掘っている穴に手を入れてみて、「こんな深いのはじめてだ」と言つて掘らない。K夫は、H夫のシャベルととりかえて掘る。HK夫「どうしても、K夫とつながらないな」K夫「まだまだだ。HK夫ちゃん。どのくらい掘った」そろそろトンネルがつながらない現実には気づき始めている。

一〇・四〇 H夫「おれ、なかなかつながらないから、やめた」と言う。ほかの子も「ぼくやめた」という。(記録略)

「次の日」 九・四〇 きとう山作りをした子どもたちが山のまわりに集まっている。HM夫「どんだんでかくししょう」K夫とHM夫、山をたいたり砂を盛ったりする。HM夫は、砂のかたまりを山にぶつつける。K夫はせつせとたたく。

九・五五 M夫がきて、山に体当りする。HM夫は「よいしょ」と言つて山に登る。M夫も登る。山が大きくなりすぎて、どうにもならなくなった感じである。

一〇・〇〇 山のまわりには誰もいなくなる。

大きな山作りは、水曜日ごろから始まっていた。金曜日には、子

どもたちと山とが一体になって動いていて、十分に楽しんでた。次の日になると、大きく大きくと思つて取り組んだ山が、山の方で勝手に大きくなりすぎてしまつて、子どもたちの手におえなくなつてしまつたようであつた。

月曜日には、また新たな取り組みが期待されたが、砂場の工事のため、取りこわされてしまつた。登園したK夫が、すぐ砂場に出ていって「あれ、変だな」とつぶやいていたが、この「山とのたたかい」は、子どもたちの中かなりの比重をもつていたのであろう。(秋間直美)

◆にわとりを追いかける

二月一日 戸外で男児七人がかけまわっている。あみの外に出しているにわとりをつかまえようとしているのである。七人は夢中でかけまわる。M夫は、用務員室からえさを取ってくる。みんなで追いかける。M夫は、カウボーイのように、にわとりになわをかけようとふり回す。にわとりはつかまえることも出来るし、追いかけていくと、思いがけない方向に逃げる。手を出してつかまえそうにするが、こわごわなので逃げられてしまふ。急に、ほかのにわとりの背中に飛びのくこともある。

子どもたちは、にわとりを追いかけることにより「変化」を追つて走り回る。大気の変化の感覚を楽しんでいると言つてよ

いであろう

(津守真)

室内で文字遊びに興じ、絵本の美しさに魅される同じ子どもが、砂山に体当たりし、息をはずませてにわたりを追いかける。

原始さながらの大自然の子どもとして過ごすひとときである。

原始と文化、これは子どもにとっていずれも大切な側面である。  
(本田和子)

### 三 「したいこと」と「よいこと」の統合

#### ◆遊び道具を片づける

一・〇八ごろ 男児五名が砂場で「実験室ごっこ」をしている。  
(記録略)

ブランコの空いているのに気づき、「しゅうちゃん、今ならブランコあいてるぜ」「やろうか」パッとかけ出して行く。

一・一五ごろ 砂場で「お団子やさん」をしていたY子とH子、そろそろへやに入りたくなる。

Y子「あたしおへやで遊ぶわ」H子「じゃお片づけしない。あたしたちの遊んだとこ」  
(記録略)

二人は自分たちの遊び道具を片づけ、男児たちの遊んだあとを片づけかけるが、途中で止めてへやにはいる。

一・四〇ごろ 「お片づけ」の声でみんなが各々の遊び道

具を片づける。一度へやにはいっていたY子とH子がまた砂場に出てきて、「実験室ごっこ」のあとを片づけ始める。

H子「男の子、うるさいかしら」

Y子「そうね、なくなったなくなっちゃって言うかもしれないわね」二人は一寸ためらって、茶碗の中の液体などはこぼさぬようソーツとかごに並べる。

Y子「捨てないでいいわよね」

からの茶碗などは丁寧に水で洗ってかごに揃えて入れる。二人でかごをソーツと持ち上げ、棚に並べる。

保育者が出てきてびっくりする。「アラアラ、まあまあ、本当にきれいに片づいたこと。まあ」二人顔を見合わせてニッコリうなずき合う。Y子たちは、自分の遊びが終わったとき、きちんと道具を片づけた。男児たちの遊びのあとを片づけたが、すぐにちゅうちょしている。それは、男児たちがまた遊び続けるかもしれないからであり、ほかの子どもによってはまた片づける時期がきていないことに気づいたからである。

「お片づけ」の声が聞こえたとき、Y子たちはまた砂場に出てきた。それは、もう午前中の遊びはすべての子どもにとって終わったのであり、道具は片づけられるべき時だと判断したためである。

二人は、自分たちの行為を、みじんも「よき行ない」ととらえていない。むしろ、極めて遠慮がちなためらいが強く見られる。それは、もしかしたら午後からも遊び続けるかもしれない他人の領分に手をふれてしまうためらいである。「他人の遊びをこわしてしまいうように申しわけないが、午前中の遊びは終わったので、一応きちんとしておきたい」という二人の気持の現われであろう。

二人の片づけ方は決してお座なりではない。細やかに心を配りながら、実に丁寧に片づけていく。この二人にとって「片づけること」は、「ねばならない」という規則として自分たちを縛るものではなく、「きちんとしたい」から出てくる行為である。きれいに洗われて並べられた道具や、片づけ終えた砂場のたたずまいを見ることに喜びがある。「ああきれいになった」という喜びを体験するために、自分たちで「きれいにしたい」のである。

保育者の示した感嘆に二人が見せた満足の笑いは、「善行を認められた得意さ」ではなく、むしろ「喜びを共有出来た嬉しさ」である。しかし、保育者と喜びを共有し合った体験は、子どもの中に一つの価値として位置づくであろう。「あれは先生も喜んでくださるよいことであつたのだ」と。

「片づけ」は、「ねばならないこと」として習慣化されるようなものではない。「周囲の人やものを大切にすること」に支えられて、「自分たちの遊び相手である『もの』を大切にしたい」心の表現として、子どもから出てくるのが本来の姿ではないのか。そして、結果として「したいこと」が「よいこと」に重なるならば、それは人間の理想の姿といえよう。

(本田和子)

## 幼児の教育 第七十巻 第十号

十月号 © 定価一〇〇円

昭和四十六年九月二十五日印刷  
昭和四十六年十月 一日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼  
発行者 津 守 真

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一

印刷所 凸版印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所  
所フレイベル館にお願いいたします